

2021年10月2日
年間第27主日
菊地功大司教 メッセージ

創世記は、冒頭で神による天地創造の業を記していますが、二章においては創造物語の視点を変え、人が賜物であるいのちを与えられた理由を記しています。

二人の人が創造された理由がそこに記されているように、わたしたちは互いに「彼に合う助ける者」となるように、そのいのちを与えられている。そう記す創世記は、わたしたちが互いに助け合い、支え合うことこそが、いのちを生きる本質であると強調します。

マルコ福音も、ファリサイ派の人たちとイエスの、離縁に関する議論について記しながら、二人の人が一体となることの根本にある、いのちに与えられた使命、すなわち、互いに助け合い、支え合うことこそがわたしたちがいのちを生きる意味であることを明確にします。

ヘブライ人への手紙は、救いの創始者、すなわち天地を形作られた神ご自身が、数々の苦しみを通じて完全な者となったことで、「多くの子らを栄光へと導いた」と記します。

教皇ベネディクト 16 世は回勅『希望による救い』の中で、「人間は単なる経済条件の生産物ではありません。有利な経済条件を作り出すことによって、外部から人間を救うことはできないのです(21)」と指摘します。その上で教皇は、「人とともに、人のために苦しむこと。真理と正義のために苦しむこと。愛ゆえに、真の意味で愛する人となるために苦しむこと。これこそが人間であることの根本的な構成要素です。このことを放棄するならば、人は自分自身を滅ぼす(39)」と述べています。

教会が常に顕彰してやまない殉教者たちは、その人生における苦しみを通じて、まさしく「人間であることの根本的な構成要素」を明確に表現した存在です。殉教者たちは信仰を生き抜くことで苦しみ抜きながらも、賜物としてのいのちを与えられた人間の生きる意味を明確にした存在です。主ご自身が苦しみを通じて多くの人を救いへと導いたよう

に、苦しみを通じて人間の本質を明確に示した殉教者たちは、そのいのちは、自分のためではなく、互いに助け合うため、支え合うためにこそ与えられていることをはっきりと示されました。

わたしたちには、苦しみのうちにあっても連帯のうちに、互いのいのちを支え合って生きることが求められています。

教皇フランシスコは、一般謁見を昨年 9 月 2 日に一時中断後再開した時、こう話されました。

「このパンデミックは、わたしたちが頼りあっていることを浮き彫りにしました。わたしたちは皆、良くも悪くも、互いに結びついています。この危機から、以前よりよい状態で脱するためには、ともに協力しなければなりません。独力ではなく、協力するのです。独りでは決してできないからです。一緒に協力するか、さもなければ、何もできないかです。わたしたち全員が、連帯のうちに一緒に行動しなければなりません。」

感染症の状況の中で、わたしたちはいのちの危機を肌で感じました。この不安と苦しみのなかにあって、わたしたちの心はどうしても自分の方へと向かってしまいます。自分のいのちを守ろうとして、利己的になってしまいます。分断と分裂、そして孤立と孤独は、この数年、世界各地で社会の課題となって顕在化してきましたが、このパンデミックによって、さらに明確な社会の課題として、いや、いのちの危機をもたらす要因として、わたしたちの目前に立ちはだかっています。わたしたちは、互いに助け合う者としていのちを与えられていることを思い起こし、殉教者の勇気に倣い、いのちを生きる本当の意味を、広くあかしし、伝えてまいりましょう。